

恵心僧都関係の説話について

——法花験記と今昔物語を中心として——

高 橋 貢

天台浄土教は、平安時代中期に恵心僧都源信が出るに及んで、頂点に達した。源信は浄土信仰の実践的な運動として二十五三昧会、靈山院釈迦講等の講会を主催し、開催している。^(註)二十五三昧会は寛和頃、横川首楞嚴院で行なわれたが、その規定である二十五三昧式、横川首楞嚴院二十五三昧起請が現存している。その規定の中に左の記事がある。即ち

若適有^二往生極樂者^一、依^二自願力^一、依^二佛神力^一、若夢若覺、示^二結緣人^一、若墮^二惡道^一、亦以示^レ此^二(二十五三昧式)^一

仰乞彌陀種覺觀音勢至、可^レ願^二七日之内示^二其生處^一、隨^二亦處善惡^一可^レ致^二志懇疎^一。(二十五三昧起請)

右の記事によると、結衆、或は結緣衆の一人が歿した時、その人がはたして往生したか、或は惡道に落ちたかを後の人に示さなければならぬわけである。^(註)

一方、後述する二十五三昧結緣過去帳、或は往生伝、説話集にとられている、往生譚、法花靈験譚等を調べると、聖人、持経者

が歿後、師友や弟子、近親者、或は他の修行者に、しばしばその往生の様子を夢中で、或は直接に示している。これらの話を右の記事と関連づけてみると、これらの話が右の講会の結衆、結緣衆、或は講衆によって、話され、伝承されたであろう事が推定できる。

往生譚、法花靈験譚が今日多く残されているが、それらの話がどこで、誰れによつて話され、伝承されたかは、今日まだほとんど未解決と言えよう。私は本論文に於て、特に法花験記と今昔物語にとられている、恵心僧都源信に關係のある説話を手懸りとして、これらの話がどのようにに伝承されたかを、幾分でも解明したいと考える。

二十五三昧会と靈山院釈迦講は源信が直接参加、主催しているが、後述するように、増賀や性空の弟子、關係者も参加している。これらの参加者の名前、或は行状は、首楞嚴院二十五三昧結緣過去帳、靈山院釈迦堂毎日作法に記載されている。これらの中には法花験記や今昔物語に登場する人がいるし、また本論文に關連のある人もいるので、まず過去帳と毎日作法について略述す

る。^(註)

前述したように、二十五三昧会は寛和頃より首楞嚴院で行なわれたが、その結衆、或は結縁衆の名前を記した二十五三昧結縁衆過去帳、及び結衆、結縁衆の行状を記した過去帳（首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳）が現存し、恵心僧都全集に所載されている。現存の過去帳は残欠本であって、源信、貞久、相助、花山法皇、良範の五人の行状だけが記載されている。過去帳は長和二年（一〇一三）七月十八日始記とある。後述するように、過去帳所収の源信譚は法花驗記や続本朝往生伝等にとられており、また相助譚は三外往生記の同話に影響を与えていると考えられるので、過去帳の書かれたのはかなり古い時期と考えられる。なお三外往生記には、相助以外に祥蓮、妙空、明普、念照、良陳、聖全の話が並んでとられていて、その後「祥蓮以下七人者、楞嚴院結縁念仏之衆也、江納言并為康等記、不_レ載_二此人等_一、二十五三昧帳中往生分也」とある。この事によって、過去帳には現存の五人以外の行状も記載されていた事が分る。現存の過去帳に記載されている五人のうち、本論文に特に関係のあるのは源信、花山法皇、相助である。

次に靈山院釈迦堂毎日作法について述べる。靈山院は正暦の頃首楞嚴院の南に建立された堂であるが、その堂で釈迦講が行なわれた。ついで寛弘四年（一〇〇七）に毎日作法が定められた（来迎寺文書）。これは靈山院における飲食、雑役、供養、経行、宿直等の規定である。来迎寺文書には毎日作法に続けて、釈迦講の講衆と考えられる名前が書かれているが、そのうち本論文と関係

のあるのは、源信、慶範、入妙、円救、鎮源、春久、明快、覚超である。

鎮源は法花驗記の著者であり、法花驗記には「首楞嚴院沙門」とある。法花驗記の成立の時期については、その序文に「長久之年秋季之月記矣」とあり、今日ではその頃までに書かれたとされている。

註1 二十五三昧会等については、井上光貞氏（日本浄土教成立史の研究）がくわしく述べておられる。

2 同様の記事は往生要集（大文第六の第二「臨終の行儀」）にもある。

3 過去帳と毎日作法については、井上氏、宮崎円遵氏（中世仏教と庶民生活）等が述べておられる。

4 これらの人々の名前は二十五三昧結縁衆過去帳にもある

5 延暦寺首楞嚴院源信僧都伝、山門堂舎記。

6 大日本史料（寛仁元年六月十日条）所収。

二

過去帳の最初に源信の伝が記載されているが、この源信伝は現存の源信諸伝のうち最古のものである。^(註)

過去帳に続いて延暦寺首楞嚴院源信僧都伝が書かれた。過去帳の僧都伝と源信僧都伝とは、僧都の誕生から、叡山に登り、名声が世に聞えるまでの話がかなり類似しており、この記事について両者に何等かの関係があったのではないかと思う。

法花驗記の僧都伝（巻下第八十三「楞嚴院源信僧都」）のうち、

僧都が叡山に登るまでの記事は過去帳と一致している。他の話は過去帳にはなく、他の資料から口伝によったのであろう。源信僧都伝との関係は全然ない。僧都が臨終の時、慶祐阿闍梨だけに、死後極楽に生れるであろうと告げるが、慶祐は過去帳、源信僧都伝には登場しない。それでは鎮源は慶祐の話をどこから得たのであろうか。鎮源が横川と関係がある事は前述したが、慶祐を別の話について調べると、今昔物語巻十七第九「僧浄源祈地藏絹與老母語」では横川の僧浄源は慶祐の弟子とある。この二話によって慶祐が横川と関係があり、この話が横川を中心に伝承された事が推定できる。

今昔物語の源信伝（巻十二第三十二「横川源信僧都語」）はどこから話をとり入れたのかというと、他の話の場合、今昔物語は法花驗記とかなり一致している話があつて、その場合今昔物語はそれらの大部分の話を法花驗記によっていると考えられる。この話については両者の話は人名、筋、文章が一致している。そこで今昔物語のこの話も法花驗記によっていると見てさしつかえないと思う。

過去帳の僧都伝に僧都の姉妹の記事がある。その第三女についての記事は左の通りである。

第三女現在在是極善人也。書寫法花經。恭敬頂戴矣。河内國有二尼。往年借之。時々拜見。所住草庵。遭火燒亡。隨身資具。皆成灰燼。唯此經一部在灰中獨存。

この記事は源信僧都伝と法花驗記には記されていない。所が今

昔巻十二第三十「尼願西所持法花經不焼給語」にこれと同様の話を載せている。今昔物語の顔西尼の話は二段に分ける事ができる。第一段は願西尼は道心があり、法花經を持し、念仏を唱え、世の人がこれを尊んだ話である。第二段は顔西尼が寿蓮威儀師の妻の邪氣を払う為に經を貸した。ある時寿蓮の家に火が出て家は燃えたが、經は焼けなかったという話である。

第一段は法花驗記（巻下第百「比丘尼願西」）と一致しており、今昔物語はこの話を法花驗記によっていると見られる。第二段は直接の典故とすべき文獻はない。過去帳の第三女の話が第二段と類似している。しかし両者を比較すると、過去帳の河内國の尼が今昔物語では寿蓮威儀師の妻となっている。また今昔物語の話は筋も複雑になっている。そこで過去帳の記事は今昔物語第二段の直接の典故とはなり得ない。

寿蓮の伝記は不明であるが、法花驗記（巻中第四十一）では定照僧都に誹謗の詞を言った為に非業の死をとげたとされている。この話の始めに「僅聞古老伝」とあるので、寿蓮の話は口伝されていたと見てよいであらう。過去帳の河内國の尼がどこで寿蓮の妻に変化したかは不明である。ただ前述したように、過去帳も法花驗記も横川とは密接な関係を持っている。この事から考えると、顔西尼の話も、寿蓮の話（寿蓮は山階寺の僧であるが）も、その頃横川で伝承されていたと考えられる。

過去帳の僧都伝に僧都の母の話が記されている。即ち

時赴公請。有所得物。撰貴贈母。母泣報云。所送之

物。雖_レ非_レ不_レ喜。通世修道。我所_レ願也。即隨_二母言_一。永絕_二萬緣_一。隱_二居山谷_一。修_二淨土業_一。

これと同様の話は、源信僧都伝、今昔物語、発心集、私聚百因縁集等、説話集その他にしばしば見る事のできる話である。今昔物語（卷十五第三十九「源信僧都母尼往生語」）ではどのようになっているかという、その要旨は、僧都が三条大后の法花八講に召された。その時賜った物を母に贈った。母からの返事では僧都を出家させたのは名僧にする為ではないといましめてあった。後、僧都は母の死に間に合って、往生を遂げしめたという話である。

過去帳と今昔物語との話はかなり相違している、過去帳が今昔物語の直接の典拠になったとは考えられない。源信の母の話は源信僧都伝にも記載されている。即ち

先是、邂逅預_二公私之請用_一。若有_二達親物_一、先贈_二堂上_一。其母泣報曰、水薪寒溫之訪、非_レ不_レ嘆美者。尼之所_レ願者、唯欲_レ令_二汝竟究_一頓證菩提之道也。受_二其箴誨_一之後、永以書_レ紳、不_レ出_二山門_一。

源信僧都伝の撰述の由米によれば、何か先行の文献を参照している。僧都が叡山に登るまでの記事は両者一致しているので、源信僧都伝は過去帳を参照しているとも考えられるが、右の記事について言うと、両者の内容は一致するが、文章は完全に一致するとは言えないので、僧都伝がはたして直接過去帳によっているかどうかは明きらかではない。

いずれにしてもこの話は元来横川に伝わっていたと考える事が

できる。過去帳が横川に関係がある事は前述したが、僧都伝も横川と関係があると思う。僧都伝は天台僧によって書かれた先行の文献によっている外、「僧都入室遺弟横川慶範上徳」の話を参照している。慶範は僧綱補任等には慶命大僧正の弟子としているが、僧都伝では源信僧都の弟子となっているし、また前記靈山院釈迦講の講衆でもある。従って僧都の母の話も、横川のこれらの人を中心として伝承されたと考える事ができよう。

註1 源信の諸伝については宮崎氏が述べておられる。

2 源信僧都伝の撰述の由米については、僧都伝の終りに「於是尚書右司郎、縦容命子曰、近曾有天台碩徳、授記録僧都平生之書一卷、文詞殊錯、終止不允、汝宜筆削著述僧都之遺美、予即避席輯曰、上徳之行狀、下愚不能述、懃雖預其文、棄以如忘、經兩年之間、一夜夢有僧、命云、汝若作横川僧都伝歟、答詞未陳、眠覺天明、由是不顧孱慧、握筆敘之、但彼記録之外、加載往年僧都入室遺弟、横川慶範上徳相談、藤宰相供養經卷日之行事、及耆旧伝來、往生靈異趣、恐有紕謬焉、願頼、今日扞悟之文、必預当生引接之記矣」とある。

3 この話は実容撰の地藏菩薩靈驗記が典拠となったと考えられる（真鍋広济氏「今昔物語と地藏菩薩靈驗記」文学・語学第七号）。

三

毎日作法の結衆の一人に春久がいる。春久は今昔物語卷十二第

三十三「多武峯増賀聖人語」に登場する。この話は増賀が叡山に登って出家し、後に道心を発して多武峯に籠り、往生する話である。このうち叡山に登るまでの話は法花驗記（卷下第八十二「多武峯増賀上人」と一致しており、今昔物語はその箇所を恐らく法花驗記によっていると考えられる。右以後の話を今昔物語は何によっているかは不明である。増賀は臨終の時、「みづはさす」の歌をよみ、碁を打ち、泥障を頭にかけて舞っている。同様の話は続本朝往生伝や発心集に見える。しかしこれらの書と今昔物語とは内容にかなりの相違があるので、これらの書を今昔物語の典故とする事はできない。

春久は今昔物語では増賀の甥となっていて、増賀の臨終の時に登場するが、春久の登場は今昔物語だけで他書には見えない。続本朝往生伝や増賀上人行業記では、春久の代りに弟子仁賀が登場している。春久は他の文献に見えないので、毎日作法に見える春久が今昔物語の春久と同一人物とは必ずしも断定できないかもしれない。そこで増賀と横川との関係について述べると、増賀は源信と同じく慈恵大僧正良源の弟子である。良源は横川に住し、法花三昧堂を建立している（慈恵大僧正伝）、増賀は横川と関係があると見てさしつかえないであろう。増賀自身も始め横川に住していたが、後に如覚（藤原高光）の勧めによって多武峯に移ったとも伝えられている（多武峯縁起、多武峯略記）。また源信の主催した講会には、直接源信と関係のある僧だけでなく、下級官吏や庶民が参加しているが、増賀の弟子も参加したと考える事ができよう。相如はその一人である。相如は増賀の弟子である

が、前述の二十五三昧会の根本結衆の一人であり（二十五三昧根本結衆過去帳）、その往生の様子は過去帳に記されている。このように増賀も増賀の弟子も、横川と関係をもっているのも、今昔物語と毎日作法との春久が同一人物であるという推定も成り立つと思う。

増賀の伝は今昔物語以前には法花驗記にある。増賀の行状や往生の様子は、春久や相如等によって横川に伝えられ、それを鎮源が聞いたのであろう。（但し相如は増賀よりも先に歿しているもので、増賀の往生譚は相如によつては横川に伝えられなかったであろう。）春久は法花驗記には出て来ないが、春久の没後、春久が増賀の話にとり入れられて、横川で伝えられた事もあり得ると考へる。

註 井上氏（前掲書）が指摘されている。

四

二十五三昧会の根本結衆の一人に花山法皇がいる。法皇は横川と関係のある外、性空上人の住していた書写山に御幸している。今日法皇著と称されている性空上人伝が存しているが、上人伝は現存する性空の諸伝のうち最古のものである。法花驗記（卷中第四十五「播州書写山性空上人」）にも性空の伝は記されている。驗記の始めの部分は性空上人伝とかなり類似しており、鎮源は恐らく性空上人伝を参照したと考えられる。驗記の後半の話、即ち花山法皇が書写山に再度御幸の時、延源阿闍梨に上人の影像を因絵させた話は性空上人伝にはない。同様の話は書写山円教寺旧記

にあるが、旧記の記事はごく簡略であつて、参照したとは考えられない。

性空上人の話は今昔物語卷十二卷三十四「書写山性空聖人語」にも記載されている。今昔物語の性空譚を便宜上幾つかの段に分けて述べてみる。第一段は性空の生誕より脊振山に移住するまでの話、第二段は毗沙門天の眷属が性空に仕える話、第三段は円融法皇の御悩を祈る為に召されたが応じなかった話、第四段は花山法皇が書写山に御幸し、延源阿闍梨をして性空の影像を写さしめた話、第五段は源心座主が書写山に行き、仏経を供養した話である。

右のうち第一段は性空上人伝と、第四段は法花驗記と内容、文章共に一致しており、今昔物語は恐らくこの両書を参照したと考えられる。他の段は今昔物語が直接参照したと思われる文献はない。それでも類話は先行文献に見る事ができる。即ち一乗妙行悉地菩薩性空上人伝（書写山円教寺旧記所収）に左の記事がある。

乙丸常隨。遺數十里。日内飯來。一事已上。不_レ違_二其心_一。天諸童子。以爲給仕。其是而已。若丸給仕。晝夜不_レ離。是鬼類也。爲_レ人有_レ恐。仍賜_二暇_一。雖_二杯悲泣_一。遂以不_レ許。

この記事は今昔第二段と類似している。両者とも性空の給仕人は超人であつて、他に迷惑を及ぼす為に暇を賜っている。一方両者の話の相違点を述べると、性空上人伝では乙丸、若丸の二人の童子が出て来るが、今昔物語では毗沙門天の眷属一人が登場する。また今昔物語の話は複雑になっている。これらの点から見ると、この性空上人伝を今昔物語の出典と見る事はできない。しか

し今昔第二段と同様の話が性空の弟子等によって伝えられていたと考える事ができる。なお天童竜神の類が性空に仕える記事は、簡単ではあるが法花驗記にも「復有_二現形承順走使_一、若_レ是天童龍神等歟」と出ている（この記事は性空上人伝にはない）。そこで右の記事と同様の話が横川にも伝えられていた事が分る。

当時、持経者や聖人が孤立していたのではなく、相互に連絡を持っていた事は、源信や寂心（慶滋保胤）に讀上人詩（書写山旧記所収）があり、また寂照（大江定基）が入宋の時、性空が送別の歌（続後撰集卷十九露旅）を贈っている事によつても分る。また性空上人伝の著者、花山法皇は二十五三昧会の根本結縁衆の一人であり、過去帳に法皇の行状が記されている。花山法皇の周囲の人々について考えると、性空の像を図した延源は飯室の僧（円教寺旧記）である。花山法皇と同時に出家した人に寂真（藤原義懷）と寂空（藤原惟成）がいる（大鏡）。寂真は飯室に住している。寂空は書写山が法皇の御願寺となり、ついで講堂が建立された時、講堂供養願文を作している（円教寺旧記）。講堂供養の時、講堂の一人に敎久がいる（円教寺旧記）。敎久は法皇とも関係があるが、一方源信の弟子であり（僧官補任等）、二十五三昧会の結縁衆の一人である。法皇と直接関係のない人について考えると、円教寺旧記に、尼入妙が病む時、性空は法花経を送っているが、入妙の名前は来迎寺文書に釈迦講の講衆の一人として見る事ができる。

これらの事によつて、花山法皇、或は性空上人と交渉を持っていた人達は、一方では書写山と、他方では横川と関連を持ってい

た事が分る。そこで性空の伝、逸話が性空の弟子だけでなく、横川にも伝えられた事が推定し得る。

註1 性空上人伝に「花山法皇（中略）長保四年（一〇〇二）

三月六日重結縁。密命仙駕。問上人行状記之。」とあり、朝野群載等には花山法皇著となっているが、書写山円教寺旧記（延照記）に「上皇勅扈從者令記。還御之後。（具平）親王取捨也。」とあって、見平親王によって手が加えられたと考えられよう。（川口久雄氏「平安朝日本漢文学史の究究」参照）。

2 大日本史料寛弘四年三月十日所収。なお本伝の撰述の由来については、末尾に「遺弟相議云。記録行状。于時寛弘七年十月十日矣。」とある。なお本伝は法皇著の上人伝と一致の箇所が多く、後者を参照したと考えられる。性空上人伝記遺続集には悉地伝について、「右伝者、長保四年御幸之時、法皇召問上人行状記之、還御之後、仰雲客被清書之、納仙洞文庫、而上人滅後、可撰賜上人伝記之由、門徒等望申之間、寛弘七年十月十日、彼記下之、名悉地伝也、儒家筆也、」とある。

3 寂真は飯室の安樂律院に住していた。安樂律院には叡桓がおり、寛和二年に源信が当院で供養を行ったのを機として、他の道心者と行法を修した（高山寺文書）。叡桓、及び叡桓の母の話は法花験記にある。後者の話は今昔物語にもとられている。

4 神西郡尼入抄病時、奉送法花経第八卷。尼悦奉安火色綵

桂。忽二尺許騰空宛転。尼殊奇之。上紙一枚。敷於桂上。奉置乃留。

五

法花験記（卷上第三十九「叡山円久法師」）と今昔物語（卷十二第三十八「天台円久が葛木山開仙人誦経語」）に僧円久の話が出ている。法花記の話は、円久が叡山に登り、師について頭密の法文を習ったが、後道心を発して愛宕護山に籠り、そこで往生する話である。今昔物語の話を便宜上二段に分けると、第一段の円久が愛宕護山に籠るまでの話は法花験記と一致していて、今昔物語は恐らく法花験記によっていると考えられる。第二段は円久が葛木山で修行していた時、仙人が来て偈を誦する話である。第二段は今昔物語以外に同一話がなく、この話がどこで伝えられていたかは明きらかではない。所が第二段の終りに「返テ後、横川ノ源信僧都ニ此事ヲ語ケレバ、僧都、此レヲ聞テ、泣ク貴ビ悲ビ給ケリ。」とあって、円久と源信とつながりを持たせている。

それでは円久は實際は源信とどれ程交渉関係があったのであろうか。法花験記では円久は叡山西塔院に住していたが、後に「移住楞嚴院」とあるので、円久が横川と関係がある事が分る。また法花験記と今昔物語に、円久は聖久に師事したとある。聖久は良源と基増の弟子（僧綱補任、法中補任）であり、また首首楞嚴院檢校、及び楞嚴三昧院十禅師に任ぜられている（皇太曆、山門堂舎記）。従って聖久は横川と関係を持ってゐるわけであり、聖久の弟子円久が横川と源信に交渉を持っている事は充分考えられ

る。

毎日作法の後記の釈迦講の参加者の中に「円救」の名前が見える。聖久は法花驗記では聖救（今昔は聖久）とある。久と教とは音が同じ為、書き変えられる可能性がある。毎日作法の円救が円久と同一人物と断定はできないが、あるいは同一人物ではないかと思う。

靈山院釈迦講の講衆のうち、法花驗記と今昔物語との両書に見える僧は、右以外に明快と覚超がいる。明快については、兄覚念の話が法花驗記巻中第七十八、今昔物語巻十四第十三に、覚超については、弟子永慶の話が法花驗記巻中第五十三、今昔物語巻十四第二十一に見える。

明快は法花驗記（今昔物語も同じ）に律師とある。明快が権律師になったのは長暦元年（一〇三七）で、長久四年（一〇四三）に権大僧都になっている。従って法花驗記が撰せられた時（長久之年）はまだ権律師であった。明快の師は明豪、覚運、皇慶（天台座主記）等であるが、覚運は慈恵大僧正良源の弟子であり、明豪も良源と源信の弟子（僧綱補任、天台法花宗相承血脈図等）なので、明快も源信と近い関係に当ると考えられる。明快の逸話は続本朝往生伝に記されているが、その話によると、明快は入円の往生の様子を語るたびに涙を流したという。法花驗記では覚念は前生の因縁を知って仏法を修行する話で往生する所までは書いていない。覚念の話は拾遺往生伝でもとり上げられている。拾遺往生伝では覚念は永承年間に没したと記されているので、法花驗記

が撰せられた時は、覚念は在世中であつた。

永慶は法花驗記には覚超の弟子とあるが、僧綱補任では証空阿闍梨入室とある。そこで僧綱補任の説を信用すると、覚超の弟子というのは誤りになるが、前述の慶範の例を考えると、必ずしもそうとは言えない。慶範の場合、僧綱補任等では慶命の弟子とありながら、源信僧都伝では源信の弟子とある。なお永慶が権律師になったのは長久四年であるので、法花驗記の撰せられた時は、律師に任ぜられる以前である。覚超は慈恵大僧正良源と源信の弟子であつて（慈恵大僧正伝、天台法花宗相承血脈図）、一般には横川の覚超と呼ばれていたらしい（赤染衛門集、袋草子）。覚超は靈山院釈迦講の講衆となっている外、二十五三昧会の根本結衆の一人である。三外往生記所引の過去帳に祥蓮の行状が記されているが、この中で、祥蓮の往生の様子は覚超の夢に現われたとある。

右の二話は今昔物語にもとり入れられている。今昔物語は二話とも法花驗記と一致しているので、法花驗記からこの二話をとりに入れたと考えられる。今昔物語のこの二話の中には、法花驗記以外に他の資料や口伝からとり入れたと考えられる話はない。

註 日本古典文学大系「今昔物語集」の頭注で指摘されている。

六

過去帳、毎日作法、法花驗記とは関係ないが、源信と関係のある話として、今昔物語巻第二十三「比叡山横川僧受小蛇身語」をとり上げる。この話は横川の聖人が臨終際に酢瓶に心を

とらわれた為往生できなかった話である。この話に源信は登場しないが、この話の終りに源信の言葉を引用し、「然レバ死ナム時ニハ墓无キ物ヲバ取隠シテ、仏ヨリ外ニ他ノ物ヲバ不レ可レ見ズトゾ、横川ノ源信僧都ハ語リ給ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。」と批評を加えている。

今昔物語は話の終りに、その話についての批評、あるいは感想が附加されている。今昔物語を他の文献と比較すると、話そのものは一致していても、今昔物語の評、感想は他には記載されていない場合が多い。そこで今昔物語の評、感想の大部分は今昔物語撰者の附加したものと考えてよいであらう。しかし一部、打聞集や日本霊異記と、話だけでなく評が一致している場合がある。^(註)この場合はもちろん、今昔物語の評、感想は撰者自身による附加ではない。この話の場合についていうと、この話は他に出典、同一話となる文献がないので、この批評がはたして撰者の附加したのか、あるいは今昔物語にとり入れられる以前から、この話について伝承されたものかは断定し得ない。両者いずれの場合にしても、話には登場して来ない源信の言葉を批評の中に引用する事は今昔物語では他に例が少い。

^(註)右の源信の言葉は往生要集や臨終行儀に見える。しかしこれらと今昔物語の話とは文がかなり相違するので、今昔物語は直接これらの文献から源信の言葉を引用したとは思えない。「源信僧都ハ語リ給ヒケル」とあるので、むしろ僧都の言葉は口伝として残っていたのではないかと思う。

この今昔物語の批評が撰者の附加したもののか、今昔物語以前か

らこの話についていたかは不明であるが、批評の附加されたこの話は源信に何か影響を受けている人によって扱われていたと考え事ができる。この話そのものは今昔物語以前にどこで伝承されたかは不明であるが、横川の僧に関する話であるので、元来横川で伝承されたと考え事ができよう。

註1 卷第三十、卷十四第四十二の評は打聞集と一致しており、卷第十四第十八、卷第十七第三十五、三十六、三十七は霊異記と一致している。

2 若有病者。安置在中。以凡生貧染。見本房内。衣蓋衆具。多生恋著。無心厭背(往生要集、臨終行儀)

人ノ心ハ物ニ随テウツリヤスシ、所モシ常ノ所ナラハ心モ亦常ノ心ナルヘシ。スミカラヒコロニカヘテ、心ヲウツシアラタムヘシ。目ニタチ心ニトマリヌランモノヲハ、ユメノ病者ノタリニハラクヘカラス。物ニフレテツタナキ心、死スルマテモアルナリ。(臨終行儀)

七

以上、法花驗記と今昔物語にとられていて、恵心僧都源信に係のある話を中心として、幾つかの話を選べたわけであるが、右の話がいずれも横川と深いつながりを持っている事が明きらになったであらう。

法花驗記の著者鎮源は横川の僧である。横川には当時持経者、聖人が各地から集って来た事が考えられる。法花驗記の編纂には、序文に記されているように、中国の文献、あるいは霊異記、

往生極楽記等の先行文献の影響が考えられるが、それ以外に横川で伝承された話が重要な素材になっていた事も充分考えなければならぬ。

今昔物語の右にとり上げた大部分の話は法花驗記にある。今昔物語のそれぞれの話は法花驗記と内容、文章共に一致しているの、今昔物語はそれらを恐らく法花驗記によっていると考えられる。ただそれぞれの話の中に法花驗記にはない話が含まれている。これらの話の大部分は直接の典故となっている文献は不明である。これらの話の中には先行文献に類話があるし、また話中の人物が過去帳や来迎寺文書に見られる場合がある。これらの文献を参照すると、法花驗記にないこれらの話も元来横川で伝

えられていたらしい事が推定できる。

今昔物語には他にも仏教説話や世俗説話があつて、これらことごとくが横川中心に伝えられていたかどうかは分らない。これらの話がどこで伝えられていたかは別の機会を待たなければならぬ。ただ今昔物語にとり入れられている話のうち、横川を中心として伝えられた話が mainstream をなしていたという事はできると思う。

附記

本論文作成に当つて、早稲田大学関係の諸先生、先輩、並に史料編纂所員山中裕氏、書写山円教寺の方々のお世話になつた事をお礼申し上げる。

紹介

岡 一 男 著

『大鏡・増鏡』

古典は読みたいが、その難解さの為になかなか読み得ないという人のために古典日本文学の現代語訳全集が出ている。この本はそのうちの一つである。現代語訳というと往々にして原作そのものから離れてしまった全く別のつまらない作品の観を呈する

恐れがあるが、この「大鏡・増鏡」は、この作品をこよなく愛し、長年研究を続けてこられたというこの上ない訳者を迎えて、原作の持ち味が充分に生かされている。又所々、適切な写真が挿入されているので、楽しみながら読むことが出来るであろう。現代語訳のあとの解説に於て著者は、まず古事記より始まる歴史文学の流れを述べ、古事記の文芸性の地盤の中から源氏物語とともに仮名文字の歴史物語文学が結実した過程を独自の文学史観によって明らかにし

ている。又大鏡の成立、作者、構想などにも新しい見解が述べられているから、大鏡を研究する者も一読する必要がある。なお、鑑賞、研究篇には、「大鏡」小島政二郎、「大鏡再読」中村真一郎、「増鏡作者の討検」石田吉貞、「増鏡と歴史」益田章があり、各々の立場からの鑑賞、研究であつて面白い。(古典日本文学全集13、四二〇頁、七〇〇円、筑摩書房刊)